

平成 30 年 6 月 30 日現在

機関番号：34403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370560

研究課題名(和文) 認知モード・言語類型・言語進化

研究課題名(英文) Modes of cognition, linguistic typology, and evolution of language

研究代表者

中村 芳久 (NAKAMURA, Yoshihisa)

大阪学院大学・外国語学部・教授

研究者番号：10135890

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：認知モードの進化という観点を導入することによって、言語類型や言語進化の議論がより明示的な形で可能となった。主客未分のIモードから、主客対峙のDモードへの認知進化を想定することによって、言語が基本的にDモードの反映であるため、諸言語がIモード認知をどの程度残しているかという観点から、言語を認知類型論的に捉えることができる。ヒトの言語を決定づける言語的要素は、Dモード認知の反映と見ることができるが、そうすると認知主体と認知客体が分離・対峙するDモードが(主客未分のIモードから)進化したことこそが、人間言語の創発を決定づける認知的要因だったと結論される。

研究成果の概要(英文)：The process from I-mode to D-mode is termed 'Desubjectification.' Languages differ in their degree of desubjectification and the proposed cognitive typology can accommodate various linguistic phenomena between the Japanese and English languages. English is a typical language of extremely high, and Japanese a typical one of extremely low, degree of desubjectification, while other languages come in between. Not only does this cognitive typology address issues and provide analyses that are crucial for an understanding of the true cognitive linguistic typology and which are frequently absent from the current debate, but it can also offer a cognitive framework for understanding linguistic typology that might be of considerably more cognitive than some of the ones currently observed. The linguistic typology based on the modes of cognition proposed here is also said to be closely related to language evolution and well-accorded with the evolutionary linguistics' spirit.

研究分野：英語学

キーワード：認知モード 言語類型 言語進化

1. 研究開始当初の背景

言語の認知的研究において、言語の構造と類型と進化の3者の関連性が不明であった。

本研究は、これに先立って開催したシンポジウム2回、フォーラム、ワークショップの成果に基づき、(間)主観性の概念について総括を行い、その本質を見据えた上で、この概念が言語分析・言語研究に対しどのような有効性を持つのか、その射程を、認知言語学の観点から詳細に、かつ体系的に究明する。総括では、諸説乱立状態にある主観性について、理論的位置づけの明確な認知文法理論における主観性を中心において、諸説の総括を行い、間主観性の議論をも導入しながら、主観性の本質を究明する。(間)主観性の射程に関しては、とりわけ諸言語に見られる主観性の質と度合いを細かく提示するなかで、この概念が認知的類型論につながり得ることを実証的に示し、さらに言語進化モデル構築にも深く関与することを示す。

2. 研究の目的

言語の構造と類型と進化の関連を認知的に捉えることが目的である。同時にこのような方向性を持つ研究の活性化を促すことも目的である。

本研究は、申請者の呼びかけで開催された2つのシンポジウム『ラネカー視点構図の射程』(2010年日本英文学会中部支部第62回大会、金沢大)、『(間)主観性の諸相』(2011年日本英語学会第29回大会、新潟大)それにフォーラム『言語と(間)主観性フォーラム in 仙台』(2012年東北大)とワークショップ『主観性から見る言語分析の展望』(2010年金沢大)から、成果とともに浮上した課題に対しプロジェクトを立ち上げ究明するものである。課題は大きく分けて2つ。第一の課題は、(1)主観性についての諸説の総括であり、認知言語学の中核をなす認知文法理論の主観性・主観的把握を明確に捉え、それとの対比で総括し、主観性の本質的な理解に到達するというものである。第二の課題は、(2)主観性の本質を押さえて、それが言語にどれほど広く深く関与しているか、主観性の射程を、言語類型論から言語進化まで体系的に解明するというものである。

課題(1)についてはまず、Langackerの提唱する認知文法理論の中では、観る・観られ関係(viewing relation)に基づいて、観る側として捉えられるのが主観、観られる側として捉えられるのが客観であることが、明快であることを確認する。いわゆる認知主体に生じる認知プロセスは観る側にかかわるものであり主観であるが、認知主体が認知する対象(知覚の対象であれ、概念化の対象あれ)は客観である。そうすると、Traugottが、文法化や言語変化で意味化するといふときの

意味は認知主体の感情や判断であったりするが、それらは知覚や概念化の対象となっている、つまり観られる側になっているので、Langackerの客観ということになる。また池上の提唱する「主観的事態把握」のなかの事態内での把握というの、Langackerの観る・見られ関係に照らすと、事態内であっても把握されるのは観られる側なので、Langackerでは客観になり、事態内から観ても、事態外から観ても、Langackerの客観ということになる。しかし池上の「主観的事態把握」の主客合一的把握とする部分は、認知主体と客体が合一したところに生じる認知であり、Langackerの主客対峙を前提とする観る・観られ関係に基づく認知では対処できない認知の側面である。Langackerの主観で捉えられない主観的認知を理論的にどう位置づけるには申請者の導入する2つの認知モード(IモードとDモード)が有用である。主客合一、主客未分の認知とアフォーダンスがどう係わるのか、個体発生的に(あるいは系統発生的に)私たちの認知が主観的に始まるのか、社会的・間主観的に始まるのかも考慮しなければならない。物語論のなかの視点と語り手の問題も考慮しなければならない。このような議論の流れを軸に、(間)主観性について、諸説を総括し、議論を練り上げ、共通理解となり得るような(間)主観性についての観点を提示する。

課題(2)については、言語が違えば認知の仕方が異なることは十分考えられることなので、日本語と同様に主観的と目される東アジアの言語を詳細に観察することにより、主観性が言語に反映する質と度合いの差を明確にする。西洋言語についても同様で、ドイツ語、フランス語についてはすでに認知モードに基づく日本語との対照研究があり、これらの言語は英語同様、主観性の反映が弱いが、その弱さの質と度合いは体系的に明らかにする必要がある。日英語の対照で主観性の反映の強弱を測る指標としての表現や構文(二十数個)がすでに存在するので(中村2009など)それをたたき台にしてより細やかで、体系的な分析を行う(例えば、日本語と中国語の「寒い!」のような主観述語には、大きな振る舞いの差があり、主観性のメカニズムに深く踏み込む必要がある)。言語対照を細かくみていく過程で、主観述語の存在と代名詞省略の現象と含意関係(implication)や、グラウンド化を明示的に行うグラウンド要素(定冠詞など)を持つ言語と補文化詞・関係詞のような言語の再帰性(recursion)と直結するような要素の存在との間の含意関係など、含意関係の一つ一つが洗い出されていくが、その結果として主観性に基づく実証的な認知的言語類型論構築の可能性が見えてくる。「する」言語 vs. 「なる」言語、主語優先言語 vs. 主題優先言語、衛星枠付け言語 vs. 動詞枠付け言語、再帰型言語 vs. 非再帰型言語のような類型も、認知的類型論の中で大きく見

直されるはずである。

言語進化の議論については、再帰的な結合性(recursive combination)がヒトの特性だとされる(Hauser 2009)。文法面や概念面の再帰性のみであれば、認知文法理論の自律要素/依存要素配合原理(A/D alignment)とモノ化能力(reification)によって対応できる(中村 2013)。しかしこのところの「心の理論」批判から「間主観性」重視への議論の移行(Call and Tomasello など)は、主客未分(すなわち自他のつながり)を前提とする間主観的な認知様式(primary intersubjectivity)があるからこそ、対峙する主客の間に心の読み合い(secondary intersubjectivity)が生じるとするものであり、再帰性の起源を心の読み合いに求める。これは、主客未分の認知様式から主客対峙の認知様式への展開と符合し、単純化すると、この前者から後者への認知様式の展開が、ヒト特有の再帰的結合を生み、言語進化に寄与したということになる。このような二層式の認知は、Stanovich(2004)以来研究が蓄積されている「心の二重過程モデル」(dual-process theory)とも対応し、ここから認知科学的検証が可能になる。

3. 研究の方法

複数の言語の詳細な認知的研究から2種類の認知モードを措定し、それが言語の構造、類型、進化を決定づけるという観点から研究を考察する。

Iモードは、認知主体と認知対象とが未分であるような認知モードである。この認知モードでは認知主体も認知対象も自律・確立していない。Iモードから展開するDモードでは、認知主体Sと認知対象Oが分離し、SがOを眺めるような認知構図をとる。SがOと分離するということは、事態認知のレベルでは、事態のような認知対象(e.g.モノの上昇)とそれを捉える認知プロセス(e.g.視線の上昇)との分離であり、それぞれが自律的になるということである。こうして自律化した認知対象は、客観的に存在するかのような世界を形成し、一方自律化した認知プロセスを内包する認知主体は、この世界に対峙してこの世界を眺めているような構図をとる。こうした二元論的世界観の成立過程を検証する。(この世界は、客観的に存在するかのようなのであるが、実際は、ヒトの認知では、対象から認知が独立しているため、さまざまな捉え方が可能であり、多様な世界観を生むことになる。)

自律化した認知プロセスは、当初それが捉えていたものとは異なるモノを捉えるようになる。この観点が、プロトタイプと拡張とスキーマからなる認知の三角形を形成するという点を検証する。

言語は基本的にDモードの反映であるが、IモードからDモードへの認知の展開(進化)

が、言語の期限と進化を決定づける認知的要因であることを検証する。

Iモードの反映とみられる言語現象が少なからず存在するが、そのような現象の多寡から、個々の言語がどの程度Iモード認知を反映しているかを観る。ここから、認知的言語類型論をはかる。

4. 研究成果

2種類の認知モードのうち、言語の基本構造を決定する認知モードがDモードであることを捉え、そのため、DモードがIモードから進化することにより言語が創発するという論点、それと、諸言語がIモード認知をどの程度反映するかで言語の認知的類型が捉えられるという論点を、提示した。具体的には以下のように示される。

(1) 語彙の用法に決定的に関与するのが認知の仕方(construal)であり、文法の概念である主語や目的語も認知的な注目の順序と深く関係し、1つあるいは2つのものに注目して事態認識が行われ、それが文によって表現される。

(2) 語の結合は、自律要素と依存要素の結合という一般原理に従って生起するのであり、たとえば動詞の意味構造の空き間を自律要素の名詞が埋めるような形で語の結合が成立する。関係からモノへのプロファイル・シフトというような認知操作が、語彙的結合(e.g.「動詞+er」)によっても、また統語的結合(e.g.関係節形成)によっても引き起こされる。

(3) 無限に文の埋め込みを繰り返すという操作は、関係からモノへプロファイル・シフトしたそのモノを、上位の文の項で表現するということの繰り返し操作に他ならない(再帰性)。

(4) Iモードから展開・進化したDモード認知で、自律要素と依存要素の切り出しが行われ(自由な結合を可能にし)認知プロセス(認知主体)が叙述対象から独立し、同一の認知プロセスによってさまざまなものが捉えられる(関係をモノとして捉えるのもその一つ)。

(5) IモードとDモードは言語対象や言語タイプロジーのための有益な観点を提供しうる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

中村芳久「認知から言語をとらえる」

(2018) 米倉綽・中村芳久編著『英語学が語るもの』くろしお出版(査読あり) 221-248

中村芳久「文法化を問う：再帰中間構文の受身用法の文法化」(2017)『日本英文学会第88回大会Proceedings』(査読あり) 219-220

中村芳久「Langackerの視点構図と(間)主観性」(2016)中村芳久・上原聡編著『ラネカーの(間)主観性とその展開』開拓社(査読あり) 1-51.

中村芳久「場所・空間を捉える認知プロセス」(2016)『ドイツ語と日本語に現れる空間把握：認知と類型の関係を問う』日本独文学会研究叢書(査読あり) 79-73

中村芳久「グラウンディング要素と across 文の意味構造：概念化の本質的側面」(2015)『日本認知言語学会論文集』第15巻(査読あり) 628-633

中村芳久「学祭研究の中の認知言語学：言語とコミュニケーションの進化」(2015)『日本認知言語学会論文集』第15巻(査読あり) 588-599

中村芳久「「場」を認知的に捉える」(2014)『日本認知言語学会論文集』第14巻(査読あり) 657-659

〔学会発表〕(計17件)

中村芳久「認知言語学と英語教育」(2018)応用認知言語学研究会・福岡認知言語学会講演、西南学院大学

中村芳久「認知言語学の思考法」(2018)大阪学院大学外国語学部総会・研究会

中村芳久「認知モードの原理」(2018)中京大学文化科学研究所言語研究グループ例会講演

中村芳久“Cognitive Linguistics and the Prague School of Linguistics” (2017) The Prague Linguistic Circle, Praha.

中村芳久“Cognitive Linguistics and constructions in English and Japanese” (2017) Serial lecture. Masaryk University and Charles University.

中村芳久“Typology and evolution of language from the perspective of Modes of Cognition” (2017) Keynote speech. The 2nd International Conference: Iaponica Brunensia 2017, Masaryk University.

中村芳久「英語教育と現代言語学：Chomsky と Langacker の merge も含めて」(2017)金沢大学英文学会特別講演

中村芳久「再帰中間構文の受身用法の文法化」(2016)日本英文学会中部支部大会シンポジウム、富山大学

中村芳久「IモードとDモードの原理：英語の感覚・日本語の感覚」(2016)中京大学国際学部英語系列講演会講演

中村芳久「IモードとDモードの原理：英語の感覚・日本語の感覚」(2016)中京大学国際学部英語系列講演会講演

中村芳久「空間・場所を捉える認知プロセス：Content vs. Construal」(2015)日本独文学会春季研究発表会シンポジウム、武蔵大学

中村芳久“Evolution of language and cognition: Recursion in CG” (2015) Invited speech. The English Linguistic Society of Japan 8th International Spring Forum, Seikei University.

中村芳久“Cognition and constructions in evolution of language” (2014) The 6th International Conference of German International Linguistics Association. Friedrich-Alexander Univerisitaet.

中村芳久「学祭研究の中の認知言語学：言語とコミュニケーションの進化」(2014)第15回日本認知言語学会シンポジウム、慶應義塾大学

中村芳久「グラウンディング要素と across 文の意味構造：概念化の本質的側面」(2014)第15回日本認知言語学会ワークショップ、慶應義塾大学

中村芳久「認知言語学と言語進化」(2014)特別講義、札幌大学

中村芳久「Iモード現象と言語進化」(2014)認知言語学セミナー in Hokkaido(招待講演)、札幌大学

〔図書〕(計2件)

米倉綽・中村芳久『英語学が語るもの』(2018)共編著、くろしお出版、253p.

中村芳久・上原聡『ラネカーの(間)主観性とその展開』(2016)共編著、開拓社、363p.

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村芳久 (NAKAMURA, Yoshihisa)

大阪学院大学・外国語学部・教授

研究者番号：10135890

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()